

仮名字母の出現傾向を用いた尾州家河内本源氏物語 関連写本の調査

齊藤 鉄也^{1,a)}

受付日 2019年5月6日, 採録日 2019年11月7日

概要: 本論文では, 同一書写者によると考えられる写本を発見することを目的に, 同音の仮名字母の出現頻度率を特徴量として, 写本の寸法や字形の類似性の指摘がある, 尾州家河内本源氏物語と伝為家筆本源氏物語, 梅沢本栄花物語, 東松本大鏡を対象とした調査を行った. 同一書写者によるとの指摘がある写本間距離の分布を推定し, その90%が該当する距離を閾値として用いた階層的クラスタ分析を行った結果, 尾州家河内本源氏物語の一部の巻は, 伝為家筆本源氏物語と梅沢本栄花物語の一部の巻と写本間距離が近いことが明らかになった. 写本間距離が近い写本は同一書写者または関係者による写本である可能性を指摘できることから, これら写本が同一の書写集団によって書写された蓋然性を高めているといえる.

キーワード: 尾州家河内本源氏物語, 梅沢本栄花物語, 東松本大鏡, 伝為家筆本源氏物語, 仮名字母, クラスタリング

Manuscripts Connected with the Bishū-ke Kawachi-bon Text of the *Tale of Genji*: A Study of Usage Frequency Patterns for *Kana*-character Variants

TETSUYA SAITO^{1,a)}

Received: May 6, 2019, Accepted: November 7, 2019

Abstract: In this paper, with the ultimate aim of developing a method for discovering among extant manuscripts common copyists not yet identified, taking the usage frequency patterns of different *kana*-character variants as a feature value, I performed a study comparing the Bishū-ke Kawachi-bon text of the *Tale of Genji* with three other manuscripts said to resemble it in both size and calligraphic style: the Umezawa-bon text of *Eiga monogatari*, the Tōmatsu-bon text of *Ōkagami*, and a text of the *Tale of Genji* traditionally ascribed to Tameie. The result of this hierarchical cluster analysis demonstrated a closeness of distance in the usage frequency patterns of *kana*-character variants for certain volumes of the Bishū-ke Kawachi-bon text of the *Tale of Genji*, the Umezawa-bon text of *Eiga monogatari*, and certain volumes of the *Tale of Genji* text traditionally ascribed to Tameie. Because, in other words, such close distances between manuscripts can be taken to indicate the possibility of their being copied by either the same or a closely-related hand, the result of this paper strengthens the likelihood that these three texts do indeed derive from either a single, or a single group of copyists.

Keywords: Bishū-ke Kawachi-bon *Tale of Genji*, Umezawa-bon *Eiga monogatari*, Tōmatsu-bon *Ōkagami*, Tameie *Tale of Genji* (Traditional ascription), *kana*-character variants, clustering

1. はじめに

古典籍の写本に特徴的に出現する, 現在使用されている

平仮名とは異なる字体を持つ変体仮名の出現傾向は, 書写年代や書写者によって影響を受けると考えられるが, その詳細は不明である. 稿者はこれまで, 変体仮名の元になった漢字である字母(以下, 仮名字母とする)の出現傾向を特徴量として写本をクラスタリングすると, 写本の書写者の推定や, 同一書写者による写本の年代推定ができる可能

¹ 淑徳大学
Shukutoku University, Iruma-gun, Saitama 354–8510, Japan
^{a)} saimune@u.shukutoku.ac.jp

性を指摘してきた [1], [2].

本論文では、この知見を生かし、書誌学より関連性が指摘されている写本に対して、仮名字母の出現傾向に基づいて計量的に調査した結果を報告する。調査対象とした写本は、尾州家河内本源氏物語（以下、尾州家本とする）[3]、伝為家筆本源氏物語（以下、伝為家筆本とする）[4]、梅沢本栄花物語（以下、梅沢本とする）[5]、東松本大鏡（以下、東松本とする）[6] を中心とした 90 写本である。

これらの写本の調査の結果、尾州家本のうち、伝称筆者を同じくし、同一人物によって室町時代初期に補写されたと考えられる 13 写本は、互いに距離が近く 1 つの群を構成すること、鎌倉時代中期という推定書写年代が指摘されている尾州家本と伝為家筆本、梅沢本の一部写本は、互いに近い距離にあり数写本からなる小群を構成すること、これら鎌倉時代の小群の群内距離は、室町時代初期の写本群と同程度に近いことが明らかになった。

同一人物によって書写された写本間の距離は互いに近い可能性が高いことから、調査対象とした写本は、同一人物が参加している集団によって書写された可能性を示している。この結果は、計量的な手法により写本間の関係を指摘し、既存の知見の蓋然性を高めると同時に、新しい仮説を提案しているといえる。

2. 本研究の目的と関連研究

本研究の目的は、書誌学で関連性が指摘されている写本を対象とし、計量的な手法で、それらの関係を調査することである。具体的には、写本寸法の類似性や推定書写年代に共通性を持つことから同一書写集団によって作成された可能性が指摘されているが、その他の根拠が示されていない写本を対象に、写本本文の仮名字母の出現傾向を用いて、同一人物による書写の可能性のある写本を探索する。写本に対しては書誌学や文献学の方法論に基づいて知見が積み重ねられてきたが、計量的な手法を適用した調査事例は少ない。そこで、本研究では、仮名字母の出現傾向の点からは同一書写者（以下、同筆とする）による写本であれば、異なる書写者（以下、他筆とする）による写本と比較して写本間距離が近いという、計量文献学の知見を用いて写本間の関係を調査する。

調査対象には、尾州家本、伝為家筆本、梅沢本、東松本を中心とした 90 写本を選択した。これらの写本は、縦 30 cm 以上、横 25 cm 程度という写本寸法を持ち、同型の写本は少ないこと、尾州家本の補写された写本を除き、推定書写年代が鎌倉時代中期とされること、尾州家本と伝為家筆本は河内本と呼ばれる種類の源氏物語の本文を持つこと、東松本は文字の字形や修正方法が尾州家本と似ていること、といった書誌学や文献学の点からの写本間の関係が指摘されている。その一方で、写本間を直接関係づける根拠はなく、これらの写本が同一集団によって作成されたかは不明であ

り、その調査は今後の課題とされている [7], [8], [9]。そこで、本調査では、仮名字母の出現傾向を用いた同筆写本を分類する手法を用いて、これらの中から同筆写本を探索することとした。関係が指摘される写本の中に、同筆の存在が明らかになれば、写本間を直接関係づける根拠となり得るからである。加えて、書誌学や文献学とは異なる方法により、同一人物が参加する同一集団によって作成された写本という仮説の蓋然性を高められるからである。

仮名字母を特徴量として着目した関連研究では、特徴量と書誌情報との関係の探索が主たる目的となっている。斎藤 [10] では、源氏物語「花散里」の写本に出現する特定の仮名字母に着目した写本の分類結果を報告している。また、沼尻 [11] では、源氏物語「篝火」の写本の仮名字母の種類数と、写本の書写年代を検討している。仮名字母の出現傾向を書写者と関連づけた研究には、小松 [12] と井浦 [13] がある。前者では、複数の和歌集の写本と絵巻の詞書の仮名字母の出現傾向の比較から同一書写者による写本の存在を指摘している。また、後者では、藤原定家とその周辺人物による写本を対象に、その書写順序の推定を試みている。

仮名字母の出現傾向を特徴量としてとらえ、計量的手法を用いて分析した研究として齊藤 [1], [2] がある。これらは、出版またはインターネット上で写本が画像公開された結果、大量の写本を調査する必要性が生じ、それに対応するために計量的手法を用いた研究である。藤原定家関連 38 資料と日大三条西家本源氏物語を中心とした 80 写本の調査結果から、同筆写本と他筆写本の分類と、同筆写本の場合、書写年代による分類の可能性を指摘している。

計量的な手法を大量の写本に適用した研究は少なく、未調査の写本は多い。このため、書誌学や文献学で指摘されている写本間の関係の確認や、関係が指摘されていない写本間に新しい関係を指摘できる可能性がある。

3. 調査対象とした写本と本文データ

表 1 に、調査対象とした写本と本文データをまとめた。本調査では、出版または画像公開されている写本の本文に基づき、写本と同一の仮名字母と行数、改行位置を持つ、稿者が作成した本文データを用いている。仮名字母の採字方針は前稿 [1] と同様である。調査対象とする仮名は、写本の本行本文の仮名とし、傍記は採用しない。調査した仮名文字数は、これまでの調査結果 [2] に基づき 5,000 文字を目安とした。表 1 中の資料名には、作品名と巻数、写本を区別する名称を、書写年代は推定書写年代を、対象本文範囲は調査した丁数を、文字数は仮名文字数を、字母数は仮名字母数を示している。

尾州家本は室町時代初期に補写された 13 写本を含む 54 巻、伝為家筆本は 8 巻、梅沢本は全 40 巻のうち、鎌倉時代中期書写とされ、写本寸法が尾州家本に似る 20 巻まで、東松本は 6 巻を対象としている。東松本は、第 1 巻中の和

表 1 調査対象とした写本
Table 1 Manuscripts Surveyed.

資料名	書写年代	対象本文範囲	文字数	字母数	資料名	書写年代	対象本文範囲	文字数	字母数
源氏物語-01-尾州家本	鎌倉中期	16 丁/1 丁欠	5,267	100	源氏物語-46-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,089	99
源氏物語-02-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,427	101	源氏物語-47-尾州家本	鎌倉中期	12 丁	5,063	97
源氏物語-03-尾州家本	鎌倉中期	全文	4,691	97	源氏物語-48-尾州家本	室町前期	全文	7,644	104
源氏物語-04-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,363	83	源氏物語-49-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,230	85
源氏物語-05-尾州家本	鎌倉中期	12 丁	5,463	93	源氏物語-50-尾州家本	鎌倉中期	12 丁	5,237	92
源氏物語-06-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,317	88	源氏物語-51-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,394	97
源氏物語-07-尾州家本	鎌倉中期	16 丁	6,093	93	源氏物語-52-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,292	95
源氏物語-08-尾州家本	鎌倉中期	全文	4,730	94	源氏物語-53-尾州家本	鎌倉中期	10 丁	5,122	92
源氏物語-09-尾州家本	鎌倉中期	16 丁	6,768	88	源氏物語-54-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,421	95
源氏物語-10-尾州家本	室町前期	12 丁	5,106	93	源氏物語-02-学習院大学本	鎌倉中期	16 丁 [14]	5,427	101
源氏物語-11-尾州家本	鎌倉中期	全文	1,759	86	源氏物語-08-國學院大学本	鎌倉中期	全文 [15]	4,757	84
源氏物語-12-尾州家本	鎌倉中期	11 丁	5,137	95	源氏物語-15-天理図書館本	鎌倉中期	19 丁 [16]	6,409	85
源氏物語-13-尾州家本	室町前期	12 丁	5,399	100	源氏物語-19-実践女子大学本	鎌倉中期	7 丁分 [17]	3,207	92
源氏物語-14-尾州家本	室町前期	13 丁	5,275	103	源氏物語-33-日大鎌倉本	鎌倉中期	12 丁 [18]	5,116	101
源氏物語-15-尾州家本	鎌倉中期	11 丁	5,021	91	源氏物語-36-日大鎌倉本	鎌倉中期	12 丁 [18]	5,324	86
源氏物語-16-尾州家本	鎌倉中期	全文	2,068	83	源氏物語-38-天理図書館本	鎌倉中期	全文 [19]	6,138	103
源氏物語-17-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,575	101	源氏物語-39-日大鎌倉本	鎌倉中期	13 丁 [20]	5,330	105
源氏物語-18-尾州家本	室町前期	12 丁	5,200	105	栄花物語-01-梅沢本	鎌倉中期	16 丁	5,399	89
源氏物語-19-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,330	82	栄花物語-02-梅沢本	鎌倉中期	19 丁	5,438	93
源氏物語-20-尾州家本	鎌倉中期	12 丁	5,305	81	栄花物語-03-梅沢本	鎌倉中期	18 丁	5,374	86
源氏物語-21-尾州家本	室町前期	12 丁	5,190	99	栄花物語-04-梅沢本	鎌倉中期	17 丁	5,613	82
源氏物語-22-尾州家本	室町前期	全文	17,813	104	栄花物語-05-梅沢本	鎌倉中期	12 丁	5,650	119
源氏物語-23-尾州家本	室町前期	全文	5,989	100	栄花物語-06-梅沢本	鎌倉中期	全文	4,081	117
源氏物語-24-尾州家本	鎌倉中期	15 丁	5,169	87	栄花物語-07-梅沢本	鎌倉中期	15 丁	5,444	92
源氏物語-25-尾州家本	室町前期	13 丁	5,581	89	栄花物語-08-梅沢本	鎌倉中期	14 丁	5,707	80
源氏物語-26-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,401	85	栄花物語-09-梅沢本	鎌倉中期	17 丁	5,517	88
源氏物語-27-尾州家本	室町前期	全文	1,300	89	栄花物語-10-梅沢本	鎌倉中期	17 丁	5,415	94
源氏物語-28-尾州家本	鎌倉中期	12 丁	5,223	91	栄花物語-11-梅沢本	鎌倉中期	16 丁	5,746	85
源氏物語-29-尾州家本	室町前期	全文	11,158	103	栄花物語-12-梅沢本	鎌倉中期	16 丁	5,724	95
源氏物語-30-尾州家本	鎌倉中期	全文/2 丁欠	4,984	88	栄花物語-13-梅沢本	鎌倉中期	14 丁	5,355	98
源氏物語-31-尾州家本	室町前期	13 丁	5,292	99	栄花物語-14-梅沢本	鎌倉中期	15 丁	5,429	90
源氏物語-32-尾州家本	鎌倉中期	14 丁	5,396	92	栄花物語-15-梅沢本	鎌倉中期	15 丁	5,503	87
源氏物語-33-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,505	94	栄花物語-16-梅沢本	鎌倉中期	16 丁	5,734	99
源氏物語-34-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,247	89	栄花物語-17-梅沢本	鎌倉中期	19 丁	5,363	90
源氏物語-35-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,316	99	栄花物語-18-梅沢本	鎌倉中期	15 丁	5,383	93
源氏物語-36-尾州家本	鎌倉中期	12 丁	5,209	91	栄花物語-19-梅沢本	鎌倉中期	16 丁	5,507	81
源氏物語-37-尾州家本	室町前期	全文/1 丁欠	5,814	96	栄花物語-20-梅沢本	鎌倉中期	全文	3,415	104
源氏物語-38-尾州家本	鎌倉中期	全文	6,157	83	大鏡-01-東松本	鎌倉中期	20 丁	5,700	111
源氏物語-39-尾州家本	鎌倉中期	13 丁	5,079	96	大鏡-02-東松本	鎌倉中期	19 丁	5,539	104
源氏物語-40-尾州家本	鎌倉中期	12 丁	5,094	86	大鏡-03-東松本	鎌倉中期	16 丁	5,521	108
源氏物語-41-尾州家本	鎌倉中期	16 丁	6,685	93	大鏡-04-東松本	鎌倉中期	16 丁	5,685	91
源氏物語-42-尾州家本	鎌倉中期	全文	5,772	93	大鏡-05-東松本	鎌倉中期	16 丁	6,002	93
源氏物語-43-尾州家本	鎌倉中期	全文	5,496	81	大鏡-06-東松本	鎌倉中期	14 丁	5,402	96
源氏物語-44-尾州家本	鎌倉中期	14 丁	5,498	88	葵巻古注-七海本 [21]	鎌倉		5,161	81
源氏物語-45-尾州家本	鎌倉中期	12 丁	5,117	108	新古今集-國學院大学本 [22]	鎌倉	45 丁分	6,460	91

歌の 1 つに「続古今和歌集」へ入集したことを示す本文の書風と似た書き入れがあることから、1265 年以後に書写されたことが指摘されている。伝為家筆本の 1 つである実践女子大学本「薄雲」は、同一巻の写本の切断された断片である断簡を 15 枚集め、合計した文字数を示している。天理図書館本「蓬生」は 2 者によって書写されていることが指摘されている。本調査では最初から 11 行目以降の伝為相筆部を対象としている。

4. 調査方法

作成した本文データから収集した仮名字母は、同音の仮名ごとに集計し、出現する頻度率を求める。写本に出現するすべての仮名字母の頻度率を仮名字母の出現傾向とし、調査対象の写本すべての写本間距離を計算する。

仮名字母の出現傾向を用いて同筆の写本間距離を調査するためには、転写元となる写本である親本や転写の際の書写態度 [23] といった、転写の際に仮名字母の選択に影響を

与えると考えられている要因が明らかな写本を利用できることが望ましいが、該当する写本は少ない [24]. そこで、同筆であることに加え、同時期の書写であること、同一ジャンルであること、という書誌情報が共通の写本を利用する。

これらの条件に該当する写本として、前稿 [2] で調査した日大三条西家本源氏物語がある。このうち、享禄 3 (1530) 年から享禄 4 年に書写されたことが明らかな、5,000 字以上の本文文字数を持つ、三条西実隆による「葵」以降の 18 写本と、公条による「賢木」以降の 18 写本を採用した。公条筆「紅梅」は、解題に補写との指摘があり除いている。

前稿の調査の結果、採用した実隆筆と公条筆写本はそれぞれ異なる群を構成していることから、同一人物による仮名字母の選択には一定の共通性があることを示している。同時に、これらの写本の書写の際には、両者が親本の仮名字母を変更し、自分自身の仮名字母の使い方で転写していることを示唆している。これに対し、同時期の享禄 3 年に書写された実隆筆「花宴」は、他の実隆筆のすべての写本と写本間距離が遠い。それゆえ「花宴」は、親本の影響を受けて他の同筆写本とは異なる仮名字母の出現傾向を持っている可能性を考慮し、写本間距離の調査対象から除いている。

また、尾州家本のうち、室町時代初期に補写された 13 写本は、伝称筆者として清水谷実秋 (以下、伝実秋とする) によるとされ、同時期の同筆の写本との指摘があるため、同筆の仮名字母の出現傾向を考察する写本として用いる。このうち、5,000 字に満たない「篝火」は上記の条件を満たさないため、除外する。その結果、12 写本を同筆、同時期、同一ジャンルの写本と看做して、写本間距離を調査する。

5. 調査結果と考察

同筆写本の調査は、次の順序で行う。最初に主成分分析を用いて、尾州家本のうち鎌倉時代の写本と伝実秋の室町時代の写本を分類できることを確認する。その後、同筆の写本間距離の分布を明らかにし、同筆と判断する閾値を求める。次に、鎌倉時代中期の写本の分類を目的に階層的クラスタ分析を行う。クラスタを分割する距離として、同筆の分布によって求めた閾値を用いる。この閾値より近い距離でクラスタを構成する写本を同筆の可能性のある写本群と見なす。最後に、クラスタを構成した写本と書誌情報との照応を行う。同筆の可能性があると考えられるクラスタに属する写本が、書誌情報により裏付けを得られるのであれば、本調査結果の蓋然性が高まるといえる。

5.1 尾州家本の主成分分析

主成分分析を行う前に、出現しない仮名字母と、出現率が 100% に近く写本間で差がない仮名字母、同音の仮名字母の中で相関が高い 2 つの字母のうちの 1 つを除外した。その結果、計 80 の仮名字母が分析対象となった。主成分

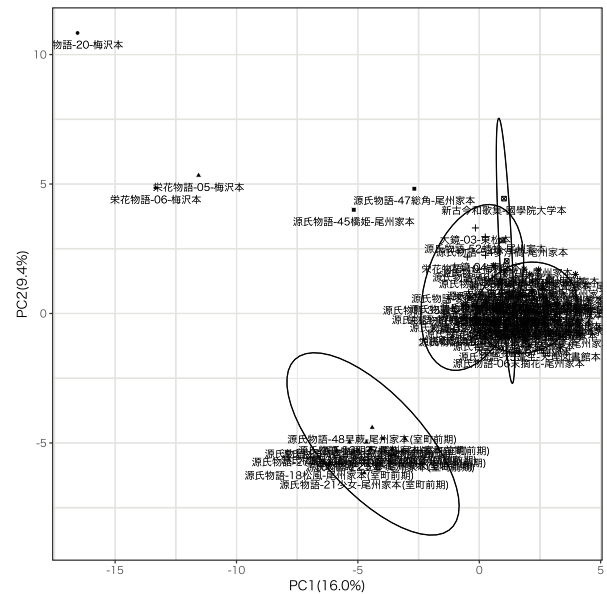


図 1 主成分分析の結果

Fig. 1 Principal component analysis plot of all surveyed manuscripts.

分析の結果を図 1 に示す。相関行列を用いた結果、第 1 主成分の寄与率は 16.0%、第 2 主成分の寄与率は 9.4% であった。主成分は、仮名字母の出現頻度率を線型結合で縮約した変数であるので、それぞれの主成分の解釈は困難である。主成分分析の結果は、さらに 2 次分析として、 k 平均法を用いた非階層的クラスタ分析で分類した。その結果も、各群に対応する 95% 信頼楕円を用いて表している。

2 次分析の結果である信頼楕円に着目すると、中央下に位置する楕円には室町時代に書写された 13 写本が群を構成している。中央右に位置する楕円には鎌倉時代に書写された写本が重なりながら複数の群を構成している。これ以外に左上とほぼ中央に位置する写本が存在する。これらは特徴的な仮名字母の出現傾向を持つ写本といえる。

この主成分分析の結果からは、伝実秋筆の室町時代初期の 13 写本が、他の鎌倉時代の写本と異なる特徴的な仮名字母の出現傾向を持ち、分類できることを示している。その一方で、左上に位置する 3 写本とほぼ中央に位置する 2 写本を除いた、残りの鎌倉時代の 72 写本は、密集して群を構成しているため、その群ごとの特徴を明らかにすることは困難である。なお、鎌倉時代に書写された 77 写本だけを対象に、相関行列を用いて主成分分析を行った結果も、左上に位置した 3 写本を除き、残りの 74 写本は密集して 4 群を構成した結果となった。仮名字母の出現傾向を用いた、同時代の複数の人物によると考えられる写本の主成分分析では、軸の解釈や群の詳細の考察が難しいといえる。

5.2 同筆の写本間距離の分布

同筆の写本間距離の分布を確認するために、伝実秋と三条西実隆、公条による同筆写本の写本間距離のヒストグラ

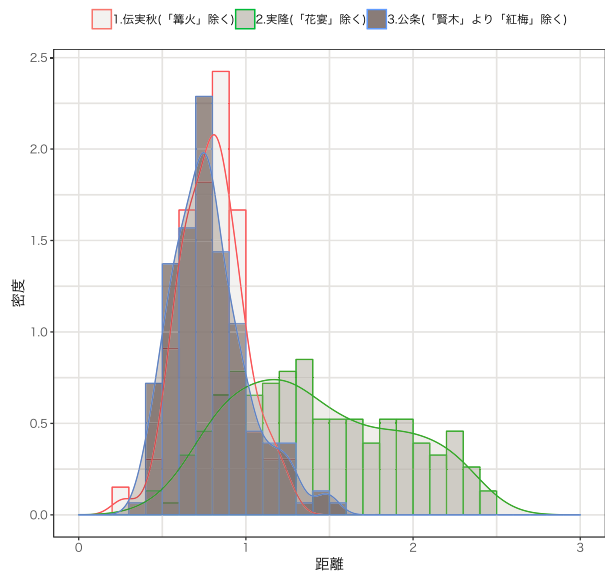


図 2 同筆の写本間距離の分布

Fig. 2 IR distance distribution histograms for manuscript Corpora by Sanetaka, Kin'eda, and Den-Saneaki.

表 2 同筆の分布の要約統計量

Table 2 Representative statistical values for each copyist's distribution.

同筆資料	平均	標準偏差	最小値	最大値	母数
1. 伝実秋	0.80	0.19	0.27	1.25	$k = 7.89, \theta = 0.18$ $\mu = -0.28, \sigma = 0.28$
2. 実隆	1.42	0.49	0.44	2.48	
3. 公条	0.78	0.23	0.35	1.51	

ムを図 2 に示す。距離関数として IR 距離 [25] を用いた。図 2 では、調査対象とした写本数が異なるため、写本間距離の分布を密度で表し、密度曲線を追加している。

それぞれの分布を最尤推定し、赤池情報量基準で適合した分布を選択をした結果、伝実秋は正規分布、実隆はガンマ分布、公条は対数正規分布が最もあてはまりが良かった。これらの同筆の分布の要約統計量と母数を表 2 にまとめた。公条の母数は対数平均と対数標準偏差を示している。

図 2 からは、写本の選択に条件を設定したとしても、書写者により分布の形状と範囲が異なっていることが明らかである。このうち、伝実秋と公条の分布は、0 に近い距離の狭い範囲に集まっていることから、両者の転写時の仮名字母の選択には共通性があることが示されている。これに対して、実隆は、前 2 者と比較し、仮名字母の出現傾向のばらつきが大きい。採用した実隆筆写本に関しては、仮名字母の出現傾向に一定の共通性があることを示す結果が得られているが、実隆による仮名字母の選択には写本間で小異があるといえる。

この結果から、本調査では同筆の写本間距離を表す分布を、複数の同筆の分布を均等に混合した分布を用いて推定することを試みた。これは、今後の継続的な調査により明らかになる可能性がある同筆の分布の情報を反映して、混

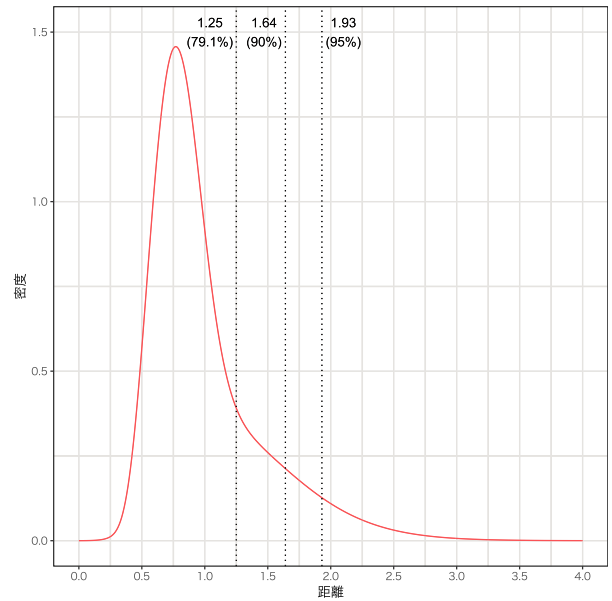


図 3 同筆の混合分布と閾値

Fig. 3 Cross-copyist mixed IR distance distribution with threshold values.

合した分布の更新を想定しているからである。

同筆の範囲を決める閾値としては、同筆の分布の中で最も距離が遠い値のうちの最小値を閾値とするか、同筆の分布を混合した分布の一定割合の値を閾値とするかが考えられる。前者であれば、伝実秋の分布の最大値である 1.25 となる。後者であれば、3 者の分布を混合し、一定の割合の値を示す距離を閾値とする。最尤推定して求めた 3 者の分布を混合した結果を図 3 に示す。図 3 には、この分布に占める、伝実秋による写本間距離の最大値である 1.25 の割合 79.1%と、90%と 95%を占める割合とその距離を示す。

今回の調査では、大量の写本の中で同筆の可能性のある写本を発見することが目的であること、また、同筆の最終的な判断は、仮名字母の出現傾向の類似性だけではなく、筆跡の比較といった複数の視点からも検証することが必要であること、より距離が近い閾値は同筆の写本を見落とす可能性が高いことから、調査対象とした 3 者の同筆の写本間距離を混合した分布の 90%の距離 1.64 を閾値として用いて、同筆写本を探索することとした。

5.3 写本間距離の閾値を用いた同筆写本の探索

多数の人物によって書写された写本を調査対象とする場合は、同筆とされる写本は少なく、分類結果も小規模のクラスタを構成することが想定される。事前に数が明らかでない小規模のクラスタを探索するためには、階層的クラスタ分析が適している。また、階層的クラスタ分析の結果である樹形図は、関連が指摘される写本を調査する見取り図として用いることができるため、同筆写本の探索に適している。そこで、5.2 節で求めた閾値を用いて、階層的クラスタ分析を行う。これまで階層的クラスタ分析で樹形図を

切断する場合には、対象とする分野の知見に基づき適切な距離で切断し、調査対象を複数のクラスタに分割するとされてきた。この方法では、分析者によって切断する距離が異なり、その分析結果も異なる可能性がある。これに対して、5.2 節で得た閾値を用いて切断する場合には、分析者に依存せず、同筆の分布の写本間距離の調査結果の蓄積によって閾値を更新し、精度の改善が期待できる。

本調査で用いた階層的クラスタ分析では、対象間の距離として IR 距離、クラスタの構成方法として最遠隣法を用いた。その結果を図 4 に示す。図 4 の源氏物語の写本名には、巻名を追加し、室町時代前期補写の写本には書写年代を追加している。樹形図を分割する 5.2 節で述べた閾値は点線で示している。考察に用いるために、伝実秋の写本間距離の最大値 1.25 も点線で示している。

図 4 からは、鎌倉時代に書写された写本によって構成されたクラスタのうち、同筆と同程度に近い写本間距離にあるクラスタを指摘することができる。それら閾値 1.64 以下で構成されている、灰色で強調したクラスタは、計 18 存在する。以下、これらのクラスタを順に検討する。

指摘したクラスタのうち、同一の作品の中で写本間距離が近いクラスタは、計 10 存在する。同筆と指摘され、5.1 節にて行った主成分分析においても分類されている伝実秋筆写本は、文字数が少ないために写本間距離が遠い「篝火」を含め、閾値 1.64 以下でクラスタを構成している。この 10 クラスタの中でも、伝実秋筆の写本間距離の最大値 1.25 以下の距離にあるクラスタは、梅沢本の 18 と 8、17 と 3、尾州家本の 44 と 32、41 と 28 の各巻である。これらは同一作品の写本作成の際に、同一人物によって書写された可能性が相対的に高い写本と考えることができる。

上記に指摘した以外の同筆と同等の写本間距離にある 8 クラスタは、異なる作品や異なる一具と考えられる写本群からなる。これに該当するクラスタには、梅沢本の 15 と尾州家本の 7、伝為家筆本の國學院大学本の 8 と尾州家本の 4、伝為家筆本の日大鎌倉本の 39 と 33 と天理図書館本の 38 と学習院大学本の 2、尾州家本の 49 と伝為家筆本の天理図書館本の 15、梅沢本の 14 と尾州家本の 3、梅沢本の 12 と尾州家本の 9、伝為家筆本の日大鎌倉本の 36 と尾州家本の 11、新古今和歌集の國學院大学本と尾州家本の 54、の各巻がある。この中でも、伝実秋筆の写本間距離の最大値 1.25 以下の距離にあるクラスタは、上記のうち、伝為家筆本の國學院大学本 8 巻「花宴」と尾州家本 4 巻「夕顔」、伝為家筆本の日大鎌倉本 39 巻「夕霧」と 33 巻「藤裏葉」と天理図書館本 38 巻「鈴虫」、伝為家筆本の日大鎌倉本 36 巻「柏木」と尾州家本 11 巻「花散里」、新古今和歌集の國學院大学本と尾州家本 54 巻「夢浮橋」である。

これらの写本は、これまで尾州家本との関係が指摘されながら、写本寸法といった書誌情報のほかには関係が不明であった写本の中で、仮名字母の出現傾向の類似性から、

同筆の可能性のある写本を指摘したことになる。同筆であれば同時期に書写された写本であり、さらには、同一人物が参加した書写集団によって書写された可能性も指摘できる。また、同筆と同等の写本間距離にある他筆写本の場合であれば、何らかの関係がある複数の人物による書写が考えられ、その理由の考察や今後の調査の必要性を示しているといえる。

加えて、尾州家本 54 巻「夢浮橋」と、写本寸法は異なるが尾州家本に關係する可能性がある写本として調査した、新古今和歌集との写本間距離が、同筆写本と同程度に近いことも明らかになった。これは本方法の利点を示しているといえる。写本間距離が閾値以下であっても他筆である可能性はあるため、最終的な同筆の判断は、筆跡といった異なる根拠に基づいて、当該分野の専門家による検証が必要である。しかし、大量の写本の中から同筆の写本を発見することや専門家を必要とする調査を実施することは容易ではない。本方法は、その前段階に、関係が指摘される大量の写本を対象とし、同筆の可能性のある写本を選別する調査として利用できることも示している。

ここまでに関係を指摘していない写本に関しては、写本間距離が遠い他筆の可能性のある写本といえる。具体的には、調査対象とした 90 写本の中で同筆の可能性のある写本は 18 クラスタ、計 50 写本あることから、その他の 40 写本は異なる人物によって書写された可能性がある。これは、今回調査した写本作成には多くの人物が参加している可能性を示し、写本作成活動が長期間にわたって行われていたか、または、相対的に短い期間で大規模に行われていたことが考えられ、その書写活動の一端を示唆する結果となったといえる。

5.4 書誌情報に基づく照応

5.3 節で指摘した同筆と同程度に近い写本うち、伝為家筆本の日大鎌倉本 39 巻「夕霧」と 33 巻「藤裏葉」の、2 つの日大鎌倉本に関しては、その写本の解題においても字形が似ているとの指摘がある。これは、本調査結果からの指摘に書誌情報に基づいた裏付けがあることを示し、本方法に一定の妥当性があることを示している。これらの写本以外には、解題で指摘がある写本は存在しない。

尾州家本と梅沢本の解題では、伝実秋とされる写本以外に同筆との記述はなく、同一書写者の存在は不明であるが、梅沢本 5 巻と 6 巻は書写者が異なるとの指摘がある。本調査結果からは、尾州家本では 5 群の、梅沢本では 4 群の同筆の可能性のある写本群が存在することが指摘でき、このなかには梅沢本 5 巻と 6 巻を含む。また、尾州家本と梅沢本の両者にまたがる写本間では 3 群が同筆の可能性がある。これは両作品が同時期に書写された可能性を示している。

これに対して、尾州家本と修正方法の類似性が指摘される東松本の間には、同筆の可能性のある写本は存在せず、

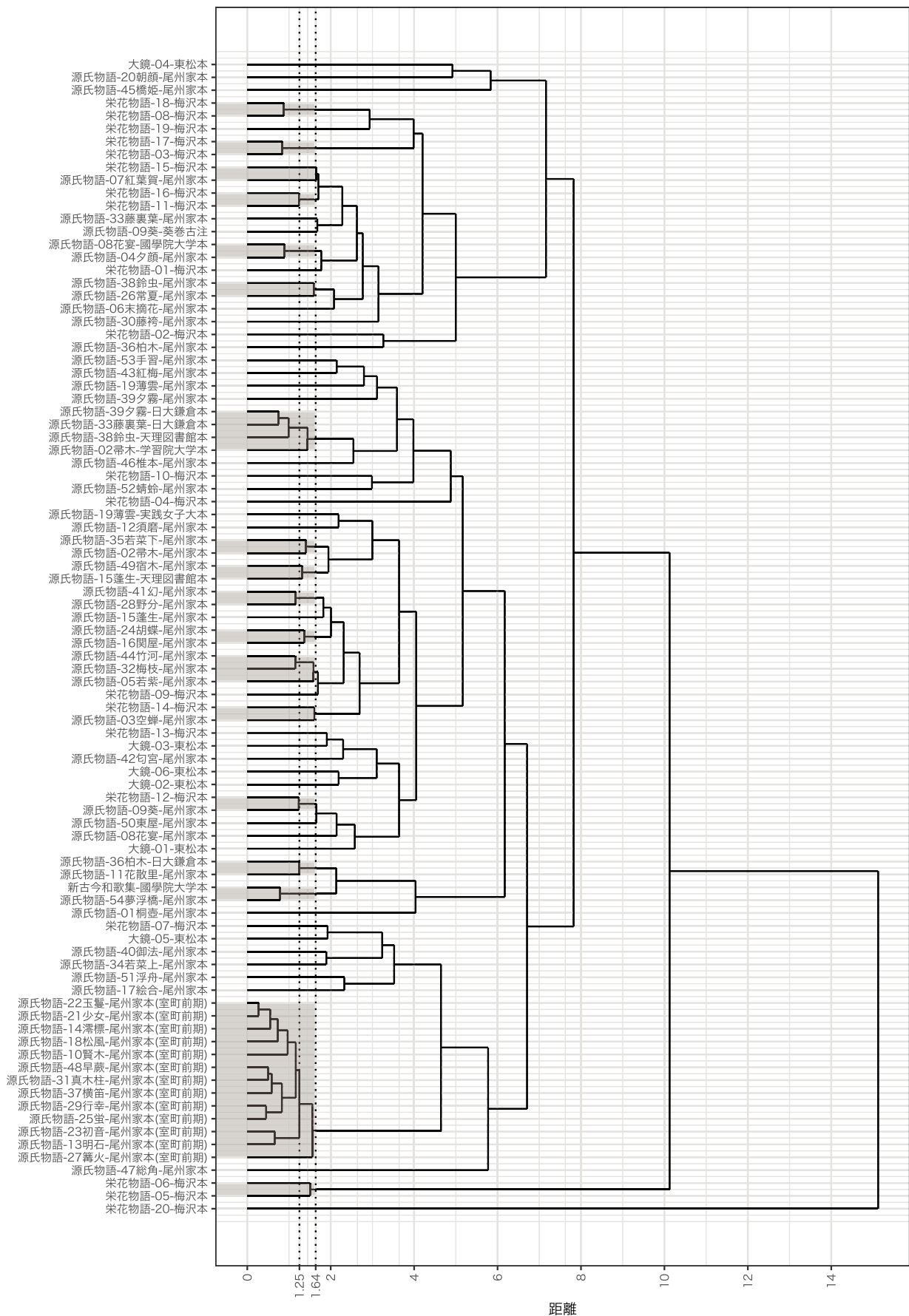


図 4 写本の階層的クラスタ分析結果

Fig. 4 Hierarchical cluster analysis of all surveyed manuscripts.

これらの写本の関係を仮名字母の出現傾向の点から明らかにすることはできなかった。この理由としては、写本寸法の類似性により同一集団内で作成された写本であったとしても、作成時期が異なった、または、今回調査対象とした写本を書写した人物とは異なる人物が担当した、といった可能性が考えられる。

6. まとめ

本論文では、書誌学の見地から関係の指摘がある鎌倉時代中期書写とされる、尾州家本と伝為家筆本の2つの源氏物語と、栄花物語、大鏡を中心とした計90写本を対象に、仮名字母の出現傾向を用いた調査結果を報告した。

仮名字母の出現傾向に基づく写本間距離によって写本を分類した結果から、同一作品の中で同筆の可能性のある写本と、異なる作品間で同筆の可能性のある写本を指摘した。特に後者は、同一人物が異なる作品を書写していたことを示し、同時期に同一書写集団によって写本が作成された蓋然性を高めていることを指摘した。同時に、本方法が、大量に存在する写本の調査に利用できることを示した。また、調査した写本の中には他筆と考えられる写本も多く存在することから、その数の多さからこれらの写本作成が長期間または大規模に行われたことを示唆し、その活動の一端を明らかにする手がかりを示した。

本調査の結果は、筆跡といった異なる根拠に基づいた検証が必要ではあるが、仮名字母の出現傾向の調査により初めて明らかになった写本間関係の指摘を含み、新しい仮説を提案したといえる。出版されている写本に限っても未調査の写本は多い。今後も同様の調査を続け、写本間関係を探索していきたい。

謝辞 本研究はJSPS科研費JP19K00349の支援により実施された。

参考文献

- [1] 齊藤鉄也：仮名字母の出現傾向を用いた藤原定家書写資料の調査, 情報処理学会論文誌, Vol.59, No.2, pp.315-322 (2018).
- [2] 齊藤鉄也：仮名字母の出現傾向を用いた日大三条西家本源氏物語の調査, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, Vol.2018, No.1, pp.59-66 (2018).
- [3] 名古屋蓬左文庫(監修): 尾州家河内本源氏物語, 八木書店 (2010, 2011, 2012, 2013).
- [4] 大内英範: 源氏物語 鎌倉期本文の研究, おうふう (2010).
- [5] 川口久雄(解説): 栄花物語梅沢本, 勉誠社 (1978, 1982).
- [6] 貴重古典刊行会: 東松本大鏡, 貴重古典刊行会 (1953, 1956, 1959, 1981).
- [7] 高田信敬(著), 紫式部学会(編): 源氏物語の古筆切二題, 古代文学論叢 第十三輯 源氏物語と源氏以前 研究と資料, pp.285-309, 武蔵野書院 (1994).
- [8] 久保木秀夫: 『栄花物語』本文再考—西本願寺本を中心とする, 中古文学, Vol.80, No.1, pp.68-79 (2007).
- [9] 大内英範(著), 助川幸逸郎, 立石和弘, 土方洋一, 松岡智之(編): 河内本研究の現在/今後, 新時代の源氏学7

- 複線化する源氏物語, pp.70-88, 竹林舎 (2015).
- [10] 斎藤達哉: 文字表記による伝本分類の試み, 科学研究費補助金基盤研究(A) 2014 年度研究成果報告書「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究 IV」, Vol.2015, No.1, pp.47-93 (2015).
- [11] 沼尻利通: 「篝火」巻の表記と字母, 科学研究費補助金基盤研究(A) 2014 年度研究成果報告書「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究 IV」, Vol.2015, No.1, pp.123-147 (2015).
- [12] 小松茂美: 日本絵巻大成 2 伴大納言絵詞, 中央公論社 (1977).
- [13] 井浦美幸: 中近世における平仮名の字体—藤原定家の平仮名, 東京女子大学 日本文学, Vol.37, No.1, pp.197-202 (1971).
- [14] 武藤那賀子: 学習院大学所蔵『源氏物語』河内本「帚木」巻解題と翻刻(第一軸・第二軸), 学習院大学 人文, Vol.16, No.1, pp.222-183 (2018).
- [15] 渋谷栄一: 「源氏物語花宴」(一軸)について: 国学院大学図書館蔵藤原為家卿筆, 國學院大學図書館紀要, Vol.7, No.1, pp.33-55 (1995).
- [16] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会(編): 天理図書館善本叢書 和書之部 第十四巻源氏物語諸本集一, 天理図書館出版部 (1973).
- [17] 横井 孝: 源氏物語 本文研究と古筆切研究のあわい, 実践國文学, Vol.93, No.1, pp.1-24 (2018).
- [18] 日本大学総合学術情報センター: 日本大学蔵源氏物語 第十二巻 鎌倉期諸本集一, 八木書店 (1996).
- [19] 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会(編): 天理図書館善本叢書 和書之部 第三十巻源氏物語諸本集二, 天理図書館出版部 (1978).
- [20] 日本大学総合学術情報センター: 日本大学蔵源氏物語 第十三巻鎌倉期諸本集二, 八木書店 (1996).
- [21] 古文学秘籍複製会編: 源氏物語古註, 古文学秘籍複製会 (1935).
- [22] 國學院大学図書館: 新古今和歌集, 國學院大学図書館(オンライン), 入手先 (<https://opac.kokugakuin.ac.jp/digital/menus/index04.html>) (参照 2019-04-30).
- [23] 浅田 徹(著), 井上宗雄(編): 「不違一字」的書写態度について, 中世和歌 資料と論考, pp.157-178, 明治書院 (1992).
- [24] 加藤洋介(著), 中古文学会関西支部会(編): 大島本源氏物語の本文成立事情—若菜下巻の場合, 大島本源氏物語の再検討, pp.135-165, 和泉書院 (2008).
- [25] 金 明哲: テキストデータの統計科学入門, 岩波書店 (2011).



齊藤鉄也 (正会員)

1971 年生。1994 年慶應義塾大学総合政策学部卒業。1996 年同大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。2002 年同博士課程単位取得退学。2018 年淑徳大学経営学部教授。古典籍の計量文献学の研究に従事。日本ソフトウェア科学会, 中古文学会会員。